

抜去歯によるコンポジット充填（主にⅡ級）後の臨床的状态について

○井形紀子、森主宜延
鹿児島大学歯学部小児歯科学講座

目的：コンポジットレジン充填後の抜去歯による評価は極めて少ない。本研究目的は理解を得て収集できた抜去歯から、Clarefil Posteriaによる主にⅡ級コンポジットレジン充填の抜去歯から認められた問題点の検討である。

対象歯と方法：対象歯は少なくとも本研究で設定した充填期間に臨床的問題がなく、正当な理由により抜去された44歯（第二乳臼歯；27歯、第一乳臼歯；12歯、乳犬歯；5歯）である。対象歯はすべて隣接面に達する充填が施されている。充填時年齢は3歳から10歳の範囲であった。充填期間は1年～7年10ヶ月であった。評価は全体と3年未満（Ⅰ群-10）、3年以上6年未満（Ⅱ群-17）、6年以上（Ⅲ群-17）の3群に分け検討した。検討内容は、充填物と関係を持つ狭義の2次齲蝕（臨床的評価C1～C2）と広義の2次齲蝕の発症、充填形態（Ithmusと充填領域評価）、充填物辺縁のステップの有無である。

結果：1. 全体でC2～C1の齲蝕が観察されたのは38.6%であった。充填期間別では、Ⅰ群（30%）、Ⅱ群（29.4%）、Ⅲ群（52.9%）であった。すべての齲蝕が乳臼歯にみられた。齲蝕罹患部位は咬合面が1例でその他すべて側室にみられ、側室頬側壁部が64.7%、側室歯肉側壁部が76.5%、側室舌側壁部が29.4%であった。2. 齲蝕罹患歯の内、狭義の2次齲蝕は全体で58.8%であった。また広義の2次齲蝕は、乳犬歯の隣接面充填を除き、Ⅰ群が28.6%、Ⅱ群が14.5%、Ⅲ群が83.3%であった。3. 側室の辺縁にステップのある歯と狭義の2次齲蝕との関係は、疑われた症例が52.9%であった。4. Ithmusの幅がいわゆる教科書的範疇（25% < X < 40%）にある対象歯は43.6%であり、この領域における齲蝕は観察されなかった。但し、一例のみ咬合面の裂溝部に（C1）が観察された。

思いがけない結果を招いた症例

○森主宜延、金城幸子、森主真弓
鹿児島大学歯学部小児歯科学講座

目的：思いがけない治療結果を招いた症例の原因は診断から治療いたる様々な要因が関与している。近年、informed consent（IC）など受療者の人権を遵守した配慮、更に、医療事故の予防から情報開示が進められている。本報告は思いがけない治療結果を招いた3症例の原因追求と反省の報告である。報告する症例は十分なICがなされ、生じた問題は本人と保護者へ報告し理解を得ている。

症例1：初診時年齢：8歳7ヶ月・女児。開業医より上顎右側第一大臼歯の萌出遅延は円錐過剰歯に起因し抜歯の依頼であった。Ⅱの萌出はみられずⅢの遠心頬側隅角部に円錐歯の尖頭を確認。X線写真では、過剰歯はⅡとの重なりⅠとⅡの歯胚はない。探針による診査で境界が感じとれ、紹介者と当科とも円錐歯は独立した過剰歯と判断、抜歯とする。抜歯中、予想に反して抵抗があり、癒合ではと迷ったが、大白歯を伴い抜歯を終了。抜去歯は、円錐過剰歯とⅡの形態歯が癒合していた。

症例2：自閉症児。初診時年齢：5歳6ヶ月。来院経過：近医での治療が困難であり来院。定期検診にて管理中、Ⅱの乳歯冠脱離にて来院。動揺もあり抜歯を想定しX線（斜位）による診査を行なう。その結果、被加療歯以外に、Ⅲに遠心根の異常吸収を2名の歯科医師と確認し抜歯と決定。抜去歯に遠心根の吸収はなく、X線像の誤りであった。

症例3：初診時年齢：3歳0ヶ月・男児。上顎乳中切歯の疼痛を訴えて来院。Ⅱ根尖部相当歯肉に発赤あり。X線写真にて歯髓腔は扁平と判断。感染歯髓の抜髓を行いFCの貼薬後、封鎖。その2週間後に来院。該当歯の根尖周囲に発赤と腫張があり、リーマーにより側壁への穿孔と思われる状態を得、臨床的症状を考慮した上で抜歯。抜歯後、2根管と確認。この場合、根尖周囲の炎症の増悪により抜歯も適応の一つと考えたが、極めて希な2根管を想定できなかったことへの反省を含めて報告。